様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３６３

研究課題名（和文）監獄のアーカイブ形成と歴史認識－近代のアジアにおける英領植民地と日本を事例として

研究課題名（英文）Making of Prison Archives and Historical Perceptions: the Cases of the British Colonies in Asia and Japan in the Modern Era

研究代表者
宮本　隆史（Miyamoto, Takashi）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：２０７５５５０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日常的な活動における記録の生産やその保存・活用あるいは廃棄といった行為を「アーカイブ」的行為ととらえ、監獄という場における事例研究を行なった。ウルドゥー語、ヒンディー語、英語、日本語の歴史資料に依拠して研究を進めることとし、アジアにおける英領植民地と明治日本の監獄に注目した。パーキスターンと日本（北海道および九州）における資料収集と現地調査を行ない、資料の分析を進めた。成果として、英領インドの北西州における監獄ネットワークの形成過程、監獄報告書等を基盤とする情報の集積を前提にした「監獄の失敗」の言説とその作用、そして「記憶の場」としての流刑地の表象についての考察を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、歴史的情報の集積としての「アーカイブ」がいかに形成され変化しネットワーク化されてきたのか、そしていかなる歴史の叙述が生産されてきたのかを、情報を取り巻く制度的・政治的・社会的な環境に関連づけて考察した。「アーカイブ」なるものが形成されてきた制度変化の過程を明らかにする作業と、歴史叙述に関する文献学的・解釈学的作業を接続する点に学術的意義があると考えている。また、「アーカイブ」と歴史叙述の関係と両者の形成過程を歴史学的に考察する試みとして、現代社会の「フェイクニュース」や歴史修正主義をめぐる議論についてのひとつの視角を提供しうるという点で社会的意義を有すると考える。

研究成果の概要（英文）：This study examined the production, preservation, utilisation and disposal of records in everyday activities as 'archival' acts, and carried out research on case studies in the context of prisons. The study was based on historical documents in Urdu, Hindi, English and Japanese, and focused on the prisons of the British colonies in Asia and Meiji Japan. Archival research and fieldwork were conducted in Pakistan and Japan (Hokkaido and Kyushu). The results include a discussion on the formation process of the prison network in the North Western Provinces of British India, the accumulation of information based on prison reports and other documents, the discourse of the 'failure of prisons' and its effects, and the representation of the penal colonies as 'realms of memory'.

研究分野：南アジア近代史

キーワード：監獄　アーカイブ　歴史認識　歴史叙述

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究では、日常的な活動における記録の生産やその保存・活用あるいは廃棄といった行為を「アーカイブ」的行為ととらえ、監獄という場における事例研究を行なった。研究代表者の言語能力の制約から、ウルドゥー語、ヒンディー語、英語、日本語の歴史資料に依拠して研究を進めることとし、アジアにおける英領植民地と日本の近代監獄に注目した。

歴史叙述と「アーカイブ」の関係については、先行研究において理論的な考察と実証的な歴史研究の双方においてそれぞれ議論がなされてきた。理論的研究においては、フーコー派の議論に見られるように、「アーカイブ」をある時代の情報の総体として抽象化して論じる傾向が強かった。一方で実証的な歴史研究の多くは、地理的に限定された事例研究となることが多い。本研究では、両者の問題設定を踏まえて、情報の集積が形成される過程と歴史叙述の生産の関係を、比較史・関係史の視点を導入して考察することとした。そのための観察対象として、18 世紀末以降に各地に導入され、運用のための情報交換が盛んになされた監獄という空間に注目した。

２．研究の目的

本研究では、アジアにおける英領植民地と日本の監獄の歴史を事例とし、歴史的情報の集積としての「アーカイブ」がいかに形成され変化しネットワーク化されてきたのか、そしていかなる歴史の叙述が生産されてきたのかを分析することを目的とした。対象期間は、両地域において近代化の過程で監獄制度が形成された 19 世紀を中心とした時期とした。

本研究では、監獄を「アーカイブ」の形成とネットワーク化の過程を観察できる格好の事例として取り上げた。監獄は、情報が集積されるローカルな場であると同時に、それぞれが世界規模の情報交換ネットワークの結節点でもあった。一方で、個々の監獄とそれが集積する情報を取り巻く政治・社会的な状況は多様であり、その歴史がいかに叙述されるかも一様ではないが、そうした叙述も歴史的に相互参照されてきた。このようにネットワーク化された監獄の「アーカイブ」と歴史叙述の相互作用を考察することを本研究の目的とした。

３．研究の方法

本研究では、近代アジアの英領植民地と日本帝国における監獄を対象とし、制度史・社会史的な検討と歴史叙述の読解を行なった。特に、(1) 監獄関係の「アーカイブ」のネットワークが形成された過程の解明と、(2) 歴史叙述の比較分析を行なうことで、ネットワーク化された「アーカイブ」と歴史叙述との相互作用を明らかにすることを狙いとした。コロナ禍の影響で資料収集の旅行が困難となり大幅な制約を受けてしまったが、パーキスターンのラーホール、イスラーマーバード、カラーチー、ムルターン、そして日本の北海道（空知と網走）と福岡（大牟田）に赴いて調査を行なうことができた。

(1) 監獄関係の「アーカイブ」のネットワークが形成された過程の解明のためには、監獄の運営についての歴史資料を収集し読解した。報告書、官報、監獄規則などの公的資料や、犯罪学・監獄学関係の雑誌などの参照関係を分析した。アジアの英領植民地に関しては、植民地や州ごとに監獄規則（Jail Manual）が作られ、会議や文書などを通じた情報交換が行なわれた。明治日本については、欧米諸国やその植民地からの影響が指摘されるが、情報の取捨選択と翻訳の過程は十分に解明されていない。『監獄協会雑誌』や監獄関係の著作を読解した。

(2) 歴史叙述の比較分析のためには、監獄の公式の歴史叙述が書かれた報告書や出版物をまず読解した。そうした公式の歴史観を踏まえた上で、受刑者、監獄職員、地域住民、人権団体、研究者など、多様な著述主体が、監獄とその歴史についてどのような叙述を行なってきたのかを分析した。こうした叙述としては、同時代の叙述だけではなく、後年になって書かれたものも存在する。こうした叙述を比較検討することで、いかなる歴史叙述の参照のネットワークが形成されてきたのかを考察した。

４．研究成果

(1) 監獄の情報交換のネットワーク基盤の形成

成果として、英領インドの北西州における監獄ネットワークの形成過程を明らかにし、論文として発表した［宮本　2023］。1870 年インド監獄法制定まで、英領インドの監獄行政の基本方針は明文化されておらず、運用方法は州の裁量に任されていた。そのため各州でさまざまな制度設計の実験的試みが重ねられたが、北西州ではベンガルと並び監獄制度改革において先駆的な試みが行なわれた。とりわけ 1857 年大反乱後の北西州では、囚人の段階的処遇制度や、行ないの良い囚人の中から看守を選び出す囚人官吏制度が実験的に行なわれ、他州にも影響を与えることになった。1850 年代までの制度変化は十分に検討されていなかったため、本論文でその研究上の空白を埋めた。近代的監獄の運動は、刑罰への自由主義的・人道主義的介入という主張をともなって開始された。1836-37 年に開催されたインド監獄規律委員会は、そうした文明化のプロジェクトとしてインドの監獄改革をいかに進めるかについて道筋を示す提言を行なった。その提言の多くは予算制約などのため実現しなかったが、監獄総監職と中央監獄の設置が 1840-50 年

代の北西州を先例として進められていった。19 世紀半ばまでに長期受刑者を中央監獄に集めて集中管理するという方式が北西州のアーグラー監獄で先駆的に試みられた。1850 年代までにその有効性が認められ、州内の６つの主要行政区に中央監獄を設置する体制が整えられた。これは、長期受刑者と短期受刑者に異なる処遇方式を適用することを容易にした。1857 年に大反乱がおこると、北インドの多くの監獄が攻撃された。北西州ではすべての監獄が大小の被害を受け、多くの囚人が逃亡した。そのため、植民地勢力の支配が回復した後にも修復や再建あるいは逃亡囚人の捕獲といった点で大きな爪痕が残った。また、被害が軽微で済んだ監獄でも、兵舎として流用するために接収されることがあった。大反乱とその後の軍による接収のため、大きな被害と支出を余儀なくされた監獄局は、中央監獄の修復と制度開発に資源を優先的に使うという選択をした。大反乱は、北西州の監獄当局が利用できる資源を極端に切り詰めさせたことによって、逆説的に中央監獄がより重視されそこで囚人処遇の新たな実験が行なわれる状況を生みだしたのである。こうして導入された中央監獄を重視する体制が、監獄の情報蓄積・交換のネットワーク基盤となったのであった。

（2）英領インドにおける「監獄の失敗」

英領インドでは、文明化の言説をともないつつ監獄ネットワークが形成された。しかし、その規模は比較的小さなものにとどまった。監獄は、社会の文明化の装置として導入されるとともに、実際には囚人の矯正や治安の改善にはさほど役立っていないという、「失敗」の言説も盛んに作られたのである。また、19 世紀後半に至っても、植民地当局は、警察を社会の隅々まで配置することはついにせず、社会の取り締まりは依然として地元有力者などに大きく委ねられていたのである。そこで発達したのは、違法行為を犯罪として取り締まるだけでなく、反乱や騒擾として集団的に鎮圧する方法であった。かくして、英領インドにおいては、多様な鎮圧対象の集団が「発見」されていくことになる。「犯罪部族」と呼ばれた人びとを典型とする、さまざまな非定住民や社会の周縁的な集団が、犯罪的性向をもつ集団とみなされて鎮圧の対象となっていった。このように、鎮圧の諸手段をもって治安を維持するという介入の仕方が正当化されるにあたって、「監獄の失敗」の言説は有用なものであった。そしてそうした言説は、監獄報告書をはじめとする情報の集積を前提としていたのである。この論点は、宮本［2022］で論じた。

(3) 歴史叙述の比較分析

監獄の歴史叙述の比較分析のために、「記憶の場」としての流刑地の表象をひとつの手がかりとして考察を行なった。特に、2022 年と 2023 年に行なった、パーキスターンと北海道における資料収集と現地調査によって、分析を進めることができた。特にパーキスターンで行なった、ウルドゥー語で書かれた流刑囚の資料調査では、英領インド政府に敵対する北西辺境のムスリム勢力に資金を送った罪で流刑に処され 1865-84 年のあいだアンダマーン流刑地で過ごしたムハンマド・ジャアファル・ターネーサリー（Muḥhammad Ja‘afar Thānesarī, 1838-1905）の著作の文献学的な事実解明を大幅に進めることができた。

宮本［2021］では、ターネーサリーによる『驚異の歴史（Tawārīkh-e ʿAjīb）』（1884/85 年）の解題と部分訳を行なった。この本は、これまで歴史研究において注目されてきたものの、ウルドゥー語原文の検討は十分になされてこなかったものである。本書には、ターネーサリーが逮捕されてから流刑地で過ごし、釈放されてベンガル経由でパンジャーブに帰還するまでの顛末が書き綴られている。解題では、アンダマーン流刑地の概要、著者と原書の全体像の内容を紹介したうえで、原書の文献学上の事実確認を行なった。そのうえで、ターネーサリーが流刑地アンダマーンで見聞した先住民社会と流刑地社会の描写部分をウルドゥー語から訳出した。アンダマーンの先住民の身体的特徴については、彼の著作に先行して書かれた植民地官僚たちによる叙述との明らかな類似性が見られる。ターネーサリーが、自身の叙述を書くにあたって、英語の既存テクストを参照していたことは明らかである。アンダマーン流刑地に関する叙述の参照のネットワークの形成の一端を彼のテクストから読み取ることができる。ターネーサリーのテクストの分析は、2020 年・2021 年の日本南アジア学会大会でも報告した。また、上記の 2022-2023 年の文献調査によって研究を深め、2023 年の第 1 回 HINDOWS 文学研究会でも発表した。

＜引用文献＞

宮本隆史．2021．「19 世紀のアンダマーン社会：ムハンマド・ジャアファル・ターネーサリー『驚異の歴史：黒い水』より」．『印度民俗研究』20：3-34．

宮本隆史．2022．「近代インドの罪と罰」．小磯千尋・小松久恵編『インド文化読本』丸善出版、pp．142-146．

宮本隆史．2023．「英領インドの文明化の使命と監獄改革：北西州における監獄行政の導入と展開」．『言語文化研究』49：131-152．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 宮本隆史	４．巻 20
２．論文標題 19世紀のアンダマーン社会：ムハンマド・ジャアファル・ターネーサリー『驚異の歴史：黒い水』より	５．発行年 2021年
３．雑誌名 印度民俗研究	６．最初と最後の頁 3-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮本 隆史	４．巻 49
２．論文標題 英領インドの文明化の使命と監獄改革 ： 北西州における監獄行政の導入と展開	５．発行年 2023年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 131-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 英国の福音主義者たちと インドの監獄改革
３．学会等名 NIHUプロジェクト「南アジア地域研究」龍谷大学拠点ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 ガーンディーと監獄
３．学会等名 Antar-rastrie Parisanvad: Mahatma Gandhi ke Sapnon ka Bharat aur Azadi ke 75 vars（国際会議マハートマー・ガーンディーの夢のインドと独立後75年）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 「黒い水」の系譜：英領インドにおける流刑者たちの書き物を読む
３．学会等名 日本南アジア学会第34回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 アーカイブとしての監獄
３．学会等名 第17回松下幸之助国際スカラシップフォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 監獄とアーカイブ：英領インドと日本帝国の比較史に向けて（La prison et les archives : pour une histoire comparee de l ’ Inde coloniale et du Japon imperial）
３．学会等名 世界で日本史を考える：日仏歴史学シンポジウム（Ecrire l'histoire au temps du global : rencontre franco-japonaise d ’ histoire）、日仏会館（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 MIYAMOTO Takashi
２．発表標題 Remember the Prisoners: 'Humanitarian' Discourse and Evolution of Prison Archive in Post-war Miike
３．学会等名 The Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference 2019, Monash University, Melbourne（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 MIYAMOTO Takashi
２．発表標題 Making of a Mourning City: The Politics of Suffering Bodies in the Miike Coal Mine, Japan
３．学会等名 Joint East Asian Studies Conference 2019, University of Edinburgh, Edinburgh（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 植民地の監獄運営における医務官たち－19世紀半ばのインド高等医務官と監獄改革
３．学会等名 日本南アジア学会全国大会、慶應義塾大学日吉キャンパス
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 英領インドの大いなる陰謀
３．学会等名 大阪大学外国語学部マンスリー多文化サロン
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 英領インドの「ワッハーブ派」の表象：アンダマーン流刑囚の書き物を読む
３．学会等名 日本南アジア学会第35回全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮本隆史
２．発表標題 「第一次独立戦争の闘士」の形成： ムハンマド・ジャアファル・ターネーサリー によるテクストの「誤読」の歴史
３．学会等名 第1回 HINDOWS文学研究会「文学と戦争」
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小磯　千尋、小松　久恵	４．発行年 2022年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 200
３．書名 インド文化読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関